

內外新報

第三十號



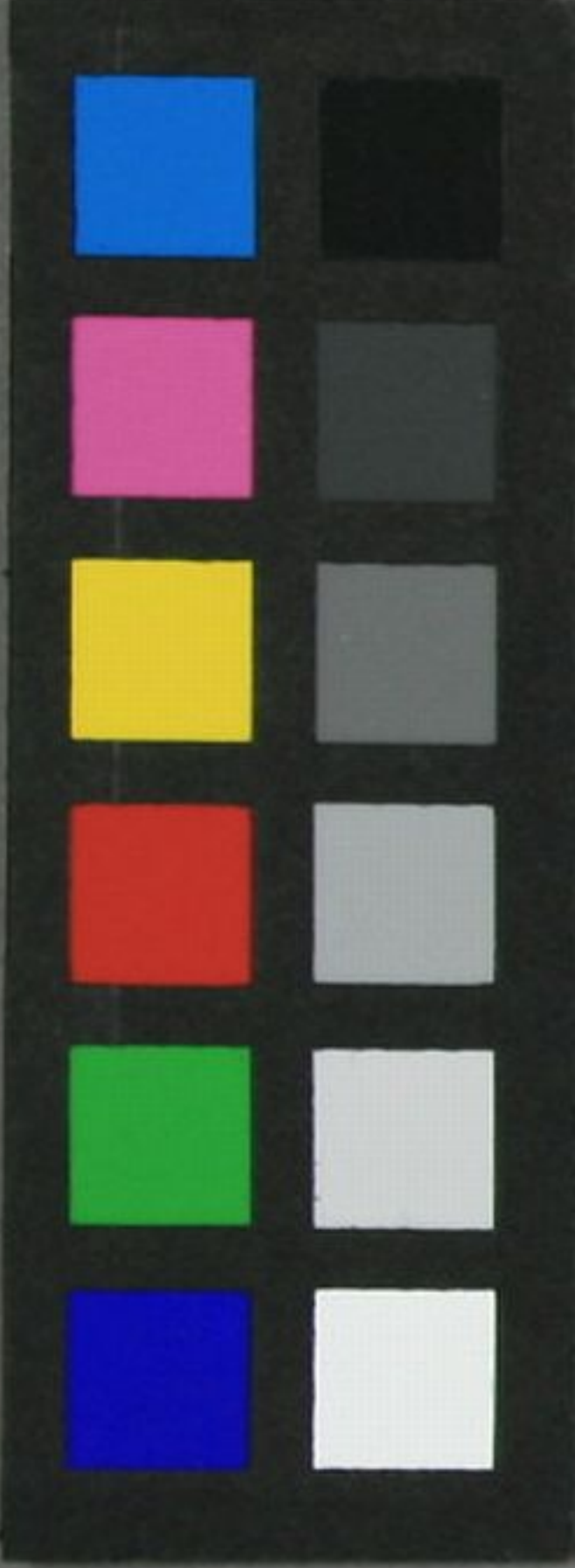
定價八

西垣文庫

文庫 10

7352

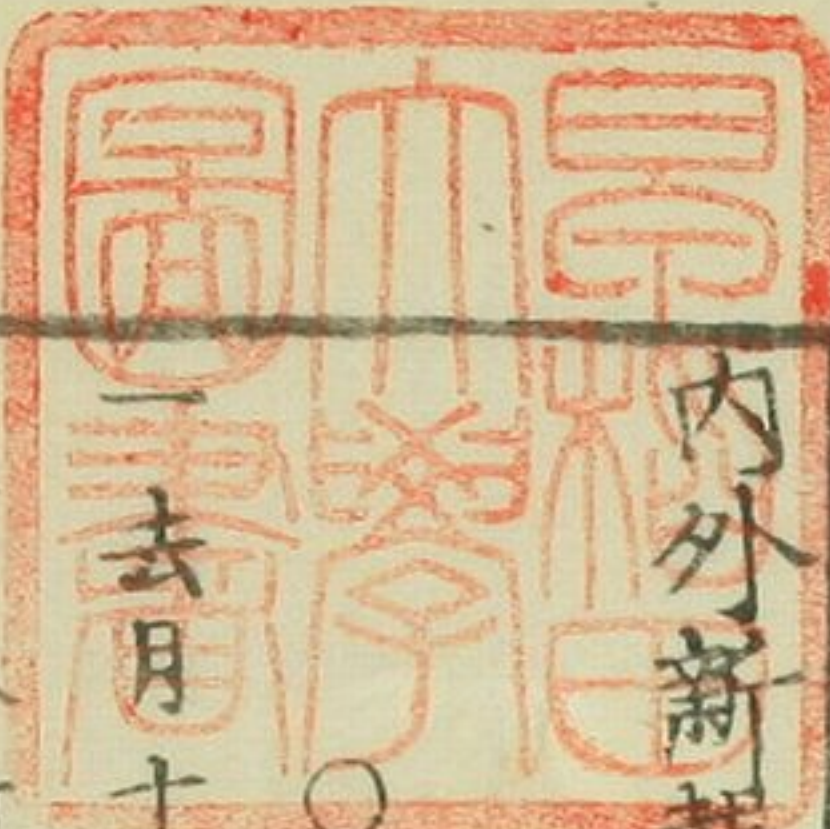
15



特 文庫10
7352
15

内外新報第三十一號

慶應四年五月二日



○四月三日 出羽奥州よりの未状

去月十九日九條殿澤殿醍醐殿へ薩長藝の人数凡七
百人附添ひ仙臺松島へ着岸城下滞留致し以當月朔
日仙臺藩隊長目付牧野新兵衛銃隊頭横田長吉郎九
條殿の命を蒙り桑折陣屋へ相越し新兵衛一人黒田
節兵衛に降奥國村々徳川家領地のか 朝廷へ召
上ひ趣口達致し以月節兵衛儀松野廉右衛門銀山
方本間六郎と共に當朔日の夕仙臺城下へ罷出駭府

西垣文庫

其外の御代官と違ひ當地ハ會津近よて敵地を和
ひ故歎真の 天領と相成りハ儀故御代官手附手代
身分如何に可相成哉難計勿論川俣小名濱村の堀共
同機仙臺家ハ御預け可相成我々當地御村諸書物急
速可引渡との 賦合ふて種々談判の上米金仕訳書差
出し傍示杭ハ 御料所仙臺御預けと認め相建高札
取外しハ儀に相極り申ハ委細ハ別紙御届書御見合
せ可被成ハ

會津追討の儀ハ仙臺一手ハ被 仰付既又先手伊達
藤五郎人数千人程米澤會津境大原口と申難場固

め小出陣の由よて今三日桑折陣屋許通り申ハ

○黒田節兵衛御届書

今般陸奥國村々徳川家御領の分被 召上 朝廷御料
に被 仰出松平陸奥守ハ御預け被 仰付ハ段先般御
下向の鎮撫使より御沙汰相成りハ別私支配所奥州伊
達信夫兩郡村々御村共取立有之ハ貢税米金其外共不
日罷越しハ請取の由のハ異儀亦く引渡し可申且村々
在来りの高札取外し傍示杭建替當月朔日より
朝廷御料と可心得音迅速觸渡し取計方萬一相拒みハ
ハ違背有之よおゐくハ討手被差向可申よ付心得違ハ

致間敷尤悔悟の上ハ速ニ陸奥守城下ハ可罷出旨同人相達シテ段家未牧野新兵衛櫻田慶助儀桑折陣屋ハ罷越申達シ森孫三郎多田銃三郎ハ一應可及通達旨も申聞儀に有之右ハ去月中孫三郎私連名ニ心得方伺書差出置 御下知の否ハ不相分得とも取掛儀彼是猶豫差延等難申及切迫儀間御達の次第承知の趣打合せ其通り取討置私儀も手代共召連せ翌二日桑折陣屋出立仙臺表ハ罷越申儀之御届申上以上

四月二日

黒田節兵衛印

御勘定所

一 九條殿ハ當時岩沼へ御宿陣の由
一 四月十九日出湯と申処よて仙臺藩會津勢と戦争有之由よて砲聲をひたゞしく相聞ハ申儀併双方共討死ハ壹人も無之趣に御座儀
一 會津勢五六百人程も白川近所小名濱支配所邊へ出兵致シ士民難儀の者へ金穀等を與へ以テ付右村々の者共より右の次第小名濱御陣屋へ相届け儀とのよ

醍醐殿四月七日白川表へ御出陣に相成り由

一 別子峠と申し場所は會津方より長廿九間の陣所
五个所有之れ所去る朔日曉は二本松勢仙臺勢官軍
勢繰込戦争は相成り双方討死有之れ得とも首九ツ
大砲三挺其外品々分取の趣は御座り

一 郡山より里數四里程西の方より當り御靈實と唱へり
峠より會津勢去る二日朝より官軍勢伊達筑前勢と
戦争大砲打合ひり得共其後の模様腕と相分り不申
り

一 三春候白川へ御出兵被 仰付上下四百人不残和流

尚士分以上陣羽織を着し手鎗を持ち騎馬の者十騎
足輕ハ不残半天股引陣羽織着用すと各小銃を持ち
り由尤も出羽荘内へ出勢被 仰付りへども遠國殊
り峠等有大砲其外武器持送り差支の旨御願ひ相
成り依之白川へ御繰出しは相成り大砲二挺兵糧陣
所道具等御領内人夫あて持送り被成去る六日七日
両日白川へ御着り相ありり

一 南部侯も同所へ出兵被 仰付凡人数千七百人の由
内千人ハ去る五日六日頃須賀川まで御繰込二百人
ハ滑川在二百人ハ笹川在へ止陣七百人御國許より

武器類牛千疋より附送り相成りしより警衛致し参
りし趣去る三月廿一日御國許御発足此節御着陣に
相成りし何れも西洋障眼のよ

一四月中旬箱館出立飛脚の咄しに官軍蒸氣船或艘に
て四月六日箱館へ御着同所御役所并に運上所等御
受取御船も不残御取揚海船通路被相止しより御奉
行始め方々も御歸府も成りがたく此頃ハ如何に
相成りしやと申聞

但し右飛脚の者官軍御役人数等も不存し得
共多分薩州長洲様御人数との噂も小由併ふり

先達て京師より命の方々も御来込と被存し
一越後新発田候の世子先達て會津へ御出の処未だ御
歸りの程相分り不申よ

奥洲海はマンホウと云へる魚あり磐城領最も多し即
ち鯨の別種なり能く水上に浮ひ睡るを以て是を以
てと云ふ其腸胃頗る下利を治す領主より毎歳
幕府に貢獻あり世に是を知る者懇望して其妙を感す
當時一般貢獻廢止せられしより如是の効能物多く鄙
地は埋められし遺憾と云ふべし

○ 磐城邊の海濱は松魚多し然れど節よして生臭く漸く其土地の用を足すのこありしが近年土佐より職人を得て本節の如く製出す

閏四月十七日より白川邊戦争の新聞を得たり猶次篇に出をべし

